一心太助（八卷）（一七五米）

帝キネ時代映畫

原作脚色者　中川藤吉
監督者　押本七之助
撮影者　鷲田誠

――主要役割――

大久保彦左衛門　片桐恒男
一心太助　結城重三郎
女房お政　秋月弘子
原伊豫守　春路謙作
與五郎　藤波麗三郎
用人喜内　曾我六
松助　川崎猛夫
虎吉　寶來數之助
米八　押本映二
可久内　美城みつる

〔略筋。一心太助は大久保家々寶の皿を破つた原因から女中お政と共に追ひ出されたが、それが緣となつて二人は新世帶を持ち魚屋を開業した。或る日出入先の松前屋五郎兵衛の危難を知り、之を救ふべく大久保に頼んだ。時の惡奉行原伊豫守と大久保彦左衛門の對決、それは大久保に不利であつた。再吟味、それも大久保の敗とならうとした時、證人を探しに用人喜内と共に奥州白川に行つてゐたが太助が馳けつけので形勢は逆轉した正義の勝となつた。〕

講釋師の張り扇から叩き出された大久保彦左と一心太助と松前屋五郎兵衛の話。それをそのまゝセルロイドに燒きつけた典型的のプロゲラム・ピクチュアである。たゞこゝにキャメラが色々と工夫され、テンポを早めて、要約の榛點を示してゐる事が發見される。だからといふて押本七之助を名監督にする譯にはゆかない。所詮はこうした凡庸作品から飛躍せざる限り、この監督の將來に期待は持てないであらう。

結城重三郎の太助は熱演ではあるが、何かしら味が不足である。片桐の大久保は戯畫化した扮裝がその効果を割引してゐる。秋月弘子、新進ではあるが、そのマスクが既に今日の映畫俳優として不適である。

――鈴木重三郎――

興行價値――可もなし　不可もなしの添物。

（六月十七日　常盤座）